

## ■ 1) 情報交換 4 点

### ▼「こどものまち」をやろうとしたきっかけ、動機

2000年のミニミュンヘンに参加した中村桃子の、「こんな面白いことに子どもの時に参加したかった。子どもの時に、自分の家の近所になかったことが悔しい!!」という思い。この思いを聞いた佐倉の人たちが「見てみたい、やってみよう」となり、縦横に協力して開催。

### ▼準備から参画している子どもたちは、??人、(年齢層別に)

準備から参画している子どもたちは、10代スタッフ、子どもスタッフとして2002で約25人、2005で約20人。2006、2007では子どもスタッフ約15人と直前3日間の準備に毎日約50名。今年度は意識づけを早めに開始する予定。

### ▼子どもたちを、どう集めるかへの工夫、悩み

- ミニさくら当日：市内の学校の全児童生徒へのチラシの配布が中心。認知が進み、それだけで多くの子どもたちが参加してくれているのは有難い。
- まち会議：子どもスタッフの事前の活動に関しては、子どもたちも塾通いや部活で忙しい中、活動の進め方と募集、声かけの方法が検討課題となっている。2008では、小学生向けのチラシと、中高生向けのチラシを別に作り市内の全校に配布予定。募集時にミニさくら当日までの半年に及ぶスケジュールや、活動内容の明記を検討中。

### ▼より主体的に参画してもらうための工夫、悩み

- ミニさくら当日：子どもが主体の遊びのまちであることを踏まえ、大人は「見守ること、忍耐すること、指図しないこと、口出ししないこと、楽園天国!」の「大人の心得」を確認。一方、子どもの主体性を引き出すために、時には大人や専門家からの支援は必要であり難しいところ。各職業ブースごとのユニフォームや目印を用意して雰囲気を作ったり、直前の準備を子どもたちと進める「ぷちさくら」や、まち会議の進め方への工夫など、毎年試行錯誤している。
- まち会議：2007では小学4～5年生が中心で、進め方に工夫が必要だった。話し合いだけでなく、ワークショップ形式や内容を絞り込んだりしたが、小学生をリードする高校生の負担が大きかった。2008では、まちの仕組みなどを楽しんでイメージできる中高生のメンバーを増やし、一方で紙幣のデザインや自分がやりたいお店のことなどより具体的なことに夢中になる小学生と役割を分けたい。